



ふじもと ひとし
藤本 仁

熊本市都市建設局下水道部
下水道総務課
経営計画室主査



よこた あつし
横田 厚志

メタウォーター株式会社
事業開発本部 開発センター
電機開発部

◆これまでの経歴

昭和60年、熊本市市役所に新規採用され、水道局配水課への配属を皮切りに、公園管理課、河川課を経て、平成12年に当時の下水道計画課へ配属となりました。今年で、下水道の計画に携わって9年目になります。

最初に任された仕事は、雨水計画の立案と管渠、浄化センターの設計でした。特に、浄化センターの設計に関しては全くの知識がなかったので、いつも設計指針と解説を読んでいたことを思い出します。

◆現在の担当業務

現在、下水道の各種計画（合流改善計画、汚泥処理処分計画、浸水対策計画など）立案業務を行っております。そのほか、処理水放流に伴う水産振興事業として、有明海への稚魚放流、海底構造物の設置や、下水処理水を有効かつ安定的に農業用水として利用して頂くために、水稲などの試験田の運営を農政部局と一緒にやっておりまして、処理水放流に係る方々と双方向の会話を常に心がけて仕事に取り組んでいます。

◆本機構と行った仕事、本機構の事業活動についての意見

熊本市が下水道新技術推進機構と仕事を一緒にさせていただくようになって4年になります。最初は、ロータスプロジェクトの事務局と参加自治体の関係というものでしたが、今年は、本市の必喫の課題である「下水汚泥処理処分」について、新設された資源循環研究部と共同研究を行いました。一緒に作り上げた成果は非常に素晴らしいものに仕上がりに感謝いたしております。今後は、これに基づき本市における下水汚泥処理処分を進めていく予定です。これからも、本市と同じように下水道事業の諸問題を抱える全国の自治体に対して、計画からシステムの導入までの幅広い知見を持つ優秀なスタッフによって解決していただくことを期待いたします。

◆これまでの経歴は

私は、平成元年に富士電機(株)に入社し、5年間は上水道向けの監視制御システムの設計、製作、試験から現地試運転調整までの納入全般業務を担当しました。

その後は、上下水道向けの監視制御システムのみではなく、電気設備全般の商談対応および納入全般業務に従事するようになりました。

以降、会社が持株会社に分社化し、富士電機システムズ(株)となり、平成20年4月には富士電機システムズ(株)と日本ガイシ(株)の水環境事業が統合合併したメタウォーター(株)となりました。これを機に開発業務に従事するようになりました。

◆現在の担当業務は

現在は、機械メーカーとの合弁会社ということから、機電融合を図るべく、機械電気の融合商品開発業務を担当しています。

◆本機構と行った仕事、本機構の事業活動についての意見をお聞かせください

「民間委託時の自治体管理業務支援システムに関する共同研究」で参画メーカーの幹事役としてお世話になりました。本研究では、下水処理施設の維持管理業務を民間委託している自治体に、実際にヒアリングやアンケート調査を実施し、民間委託における課題を抽出、整理し、これらをシステム化することについての技術資料として取りまとめています。

本技術資料が、包括的民間委託を導入した自治体において、下水処理施設における有効な運用支援および技術力維持向上の一助なることを願っています。

下水道事業に関しては、本研究の維持管理上の課題だけではなく、資源、燃料化等これから進歩すべき技術が数多くあります。今後の下水道新技術推進機構に期待しております。



さいとう としあき
齋藤 利晃

日本大学理工学部
准教授

◆これまでの経歴は

博士（工）の学位取得後、平成7年に日本大学に助手として赴任し、現在に至るまで14年ほど土木工学科に勤務しています。現在の研究テーマの基礎は、専任講師時代の平成14年に、大学の制度で1年間オランダに留学した際に築いたものです。

◆現在の担当業務は

授業では、上下水道工学や環境工学に関する講義・演習、および水質実験などを担当しています。現在取り組んでいる研究テーマは、生物学的リン除去の不安定化因子の検討、水処理プロセスから発生する亜酸化窒素の排出抑制、および微生物電池による下水からのエネルギー回収に関する研究の3テーマです。

◆本機構と行った仕事、本機構の事業活動についての意見をお聞かせください

「下水道における地球温暖化防止対策検討委員会」において、下水道の取り組むべき方向性の議論と、「下水道における地球温暖化防止実行計画策定の手引き」の改定作業に参加させていただいています。地球温暖化防止における下水道の寄与はとて大きいので、参加させていただいていることを大変光栄に感じています。また、大学に居ては分からない現場の取り組みや課題について、地方自治体の方々から勉強させて頂く機会としても重要だと感じています。

地球温暖化問題に象徴されるように、社会基盤のあり方が大きく変わろうとする時代において、下水道の目指すべき方向性を明示する組織として、下水道機構の重要性は、今後益々高まることが考えられます。下水道機構の益々の発展を願うとともに、微力ながら幾ばくかの貢献ができればと考えております。



たかせ ゆきひろ
高瀬 行廣

新技術研究所 研究第二部
副部長

◆これまでの経歴は

横浜市に入庁してから30有余年、道路局を皮切りに下水道局、港湾局、再び下水道局とインフラ整備の事業部門において、主に実施設計や設計・積算基準を担当してきました。特に、下水道の標準歩掛を設定する「歩掛検討小委員会」にて、延べ10年間委員として携わったことや下水道協会等の関連する委員会に参加していたことから、国や自治体等、多くの方々と交流できたことが私にとって大切な財産となっています。

◆これまで思い出に残る仕事は

管渠の実施設計を担当していた昭和62年当時、雨水増強幹線のシールド工事を2工区に分割して発注計画をしていたところ、中間立坑の用地交渉が不調となり、約1.6kmを1工区で掘進することになりました。このため、長距離・急曲線対応の技術検討の後、工事費を算出したところ10億円を超え「これは大変なことだ、一担当者が扱うには大き過ぎる」等、事の重大さにあらためて気づき、間違いは無いが、何度も何度も積算内容をチェックしたものです。

また、港湾局では、平成9年から11年にかけて、みなとみらい21新港地区（現在、観覧車がある地区）にて基盤整備を担当していました。ライフラインや街区整備の他、観覧車等街区内の店舗工事等、グラウンドオープンに向けて殆どの工事が競合していました。このため、連日工程調整会議を行い、各工事の進捗状況の把握や競合部分の調整を行うと共に、資機材搬入路の確保やテナント作業員用の駐車場の確保に至るまで、終盤はてんでこ舞いでしたが、何とか期限に間に合いました。今は、横浜の顔になっている「みなとみらい地区」の街づくりに参画でき光栄に思っています。

◆今後の抱負をお聞かせください

合流改善、地震対策、浸水対策、改築・更新、長寿命化等、維持管理がキーワードとなっています。維持管理業務は、その重要性が認識されつつも、地味で日陰の存在でしたが、表舞台に立ちつつあります。管路施設の維持管理に携わった経験を業務に活かして行きたいと思っています。